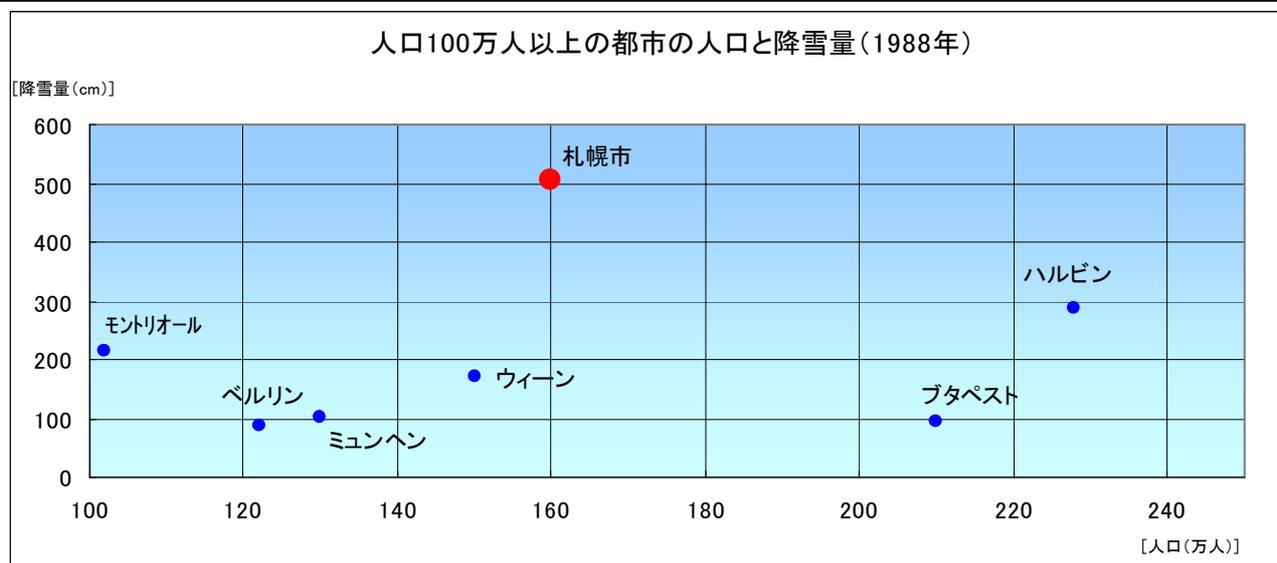


1 札幌市の特徴

(1) 主な北方都市との降雪量の比較

○札幌市は、約5mもの年間降雪量があるにもかかわらず、180万人以上の人口を抱える世界的にもまれな多雪大都市である。

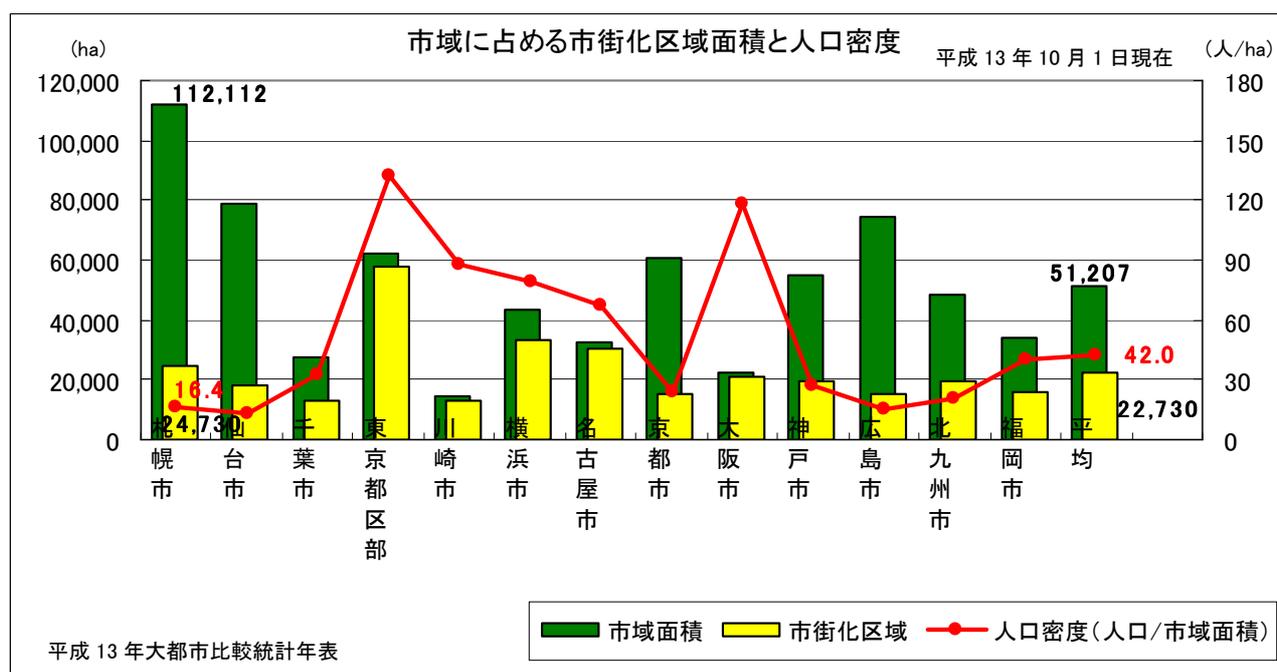


(2) 市域面積と人口密度

○市域面積は112,112haであり、全国の都市の中では、いわき市、静岡市に次いで3番目に広い(市域の6割近くを山林が占めている)。

○札幌市の市街化区域面積は24,730haで、市域面積の2割程度にすぎない。

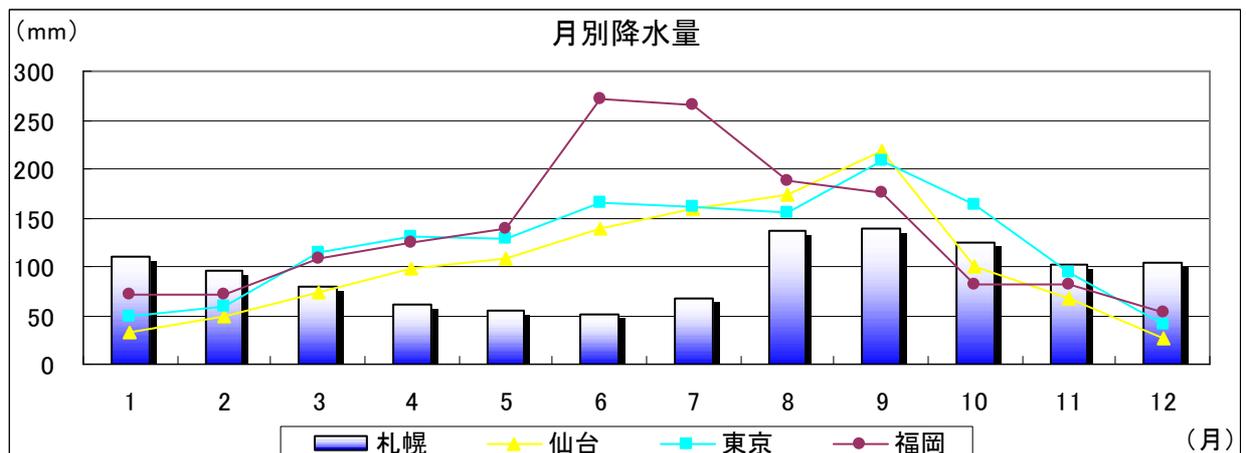
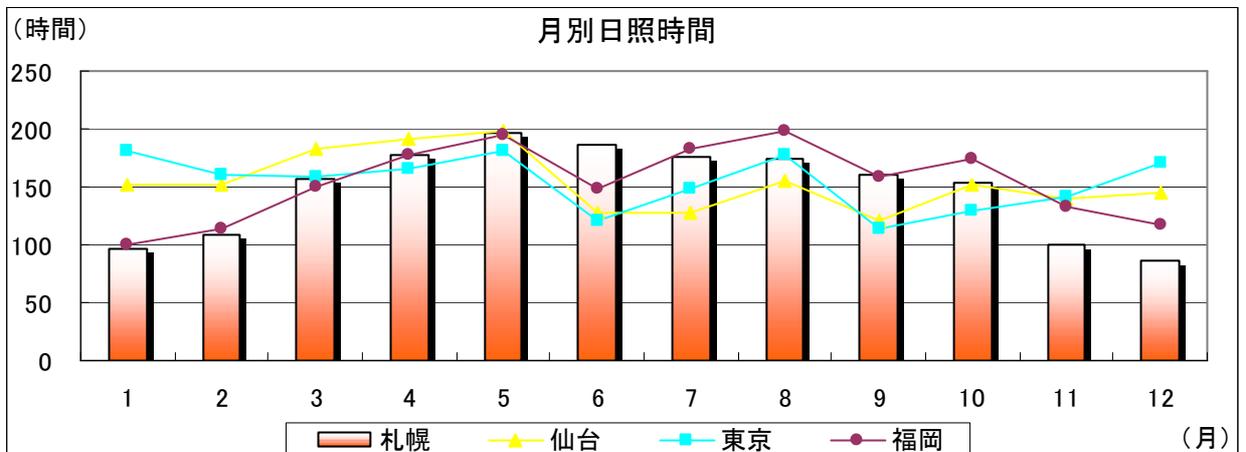
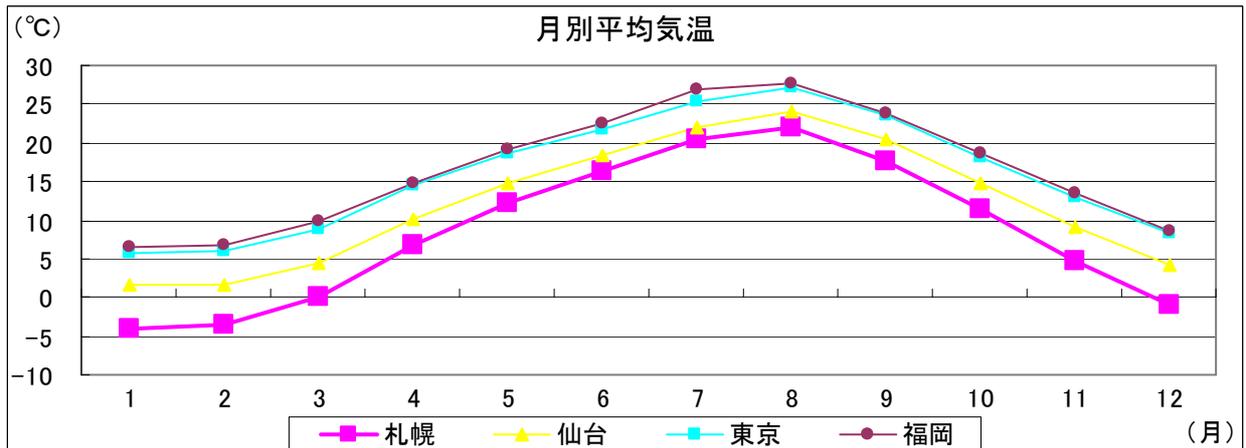
○全市域の人口密度は16.4人/haで、政令指定都市の中では、仙台市、広島市に次いで3番目に低い。



(3) 札幌の気候

- 札幌は、夏季はさわやかで冬季は積雪寒冷を特徴とした、鮮明な四季の移り変わりがみられる。
- 特に、他都市と比較して、梅雨前線による長雨がほとんどないため、春から夏にかけての降水量が極めて少なく、日照時間は、冬季は少ないものの春から秋にかけて安定して確保されている。

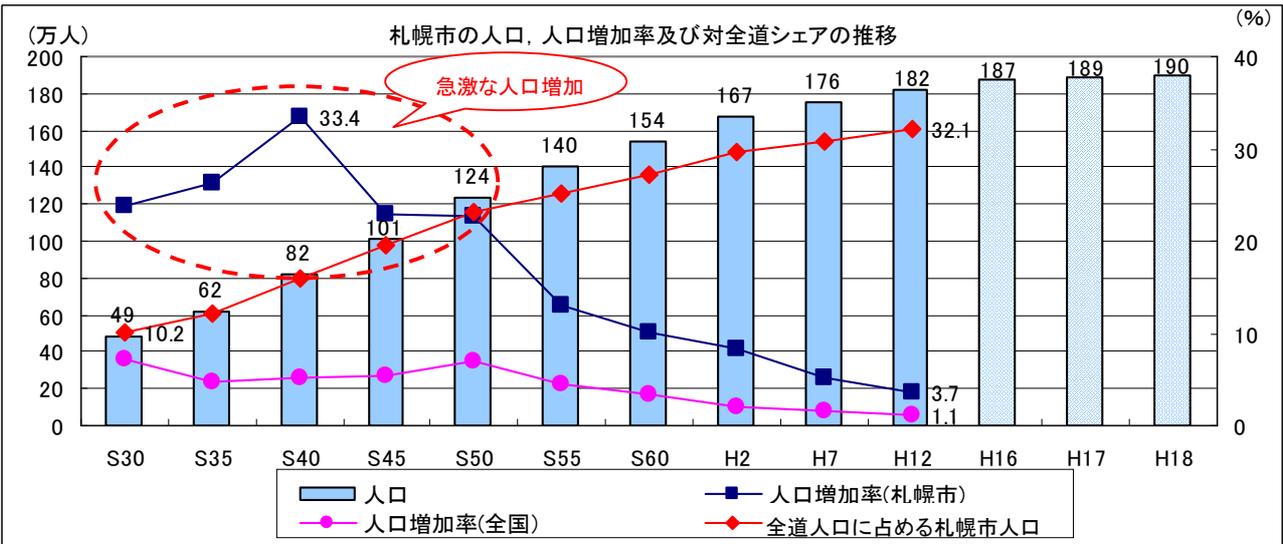
■気温・日照時間・降水量の他都市比較



2 人口の状況

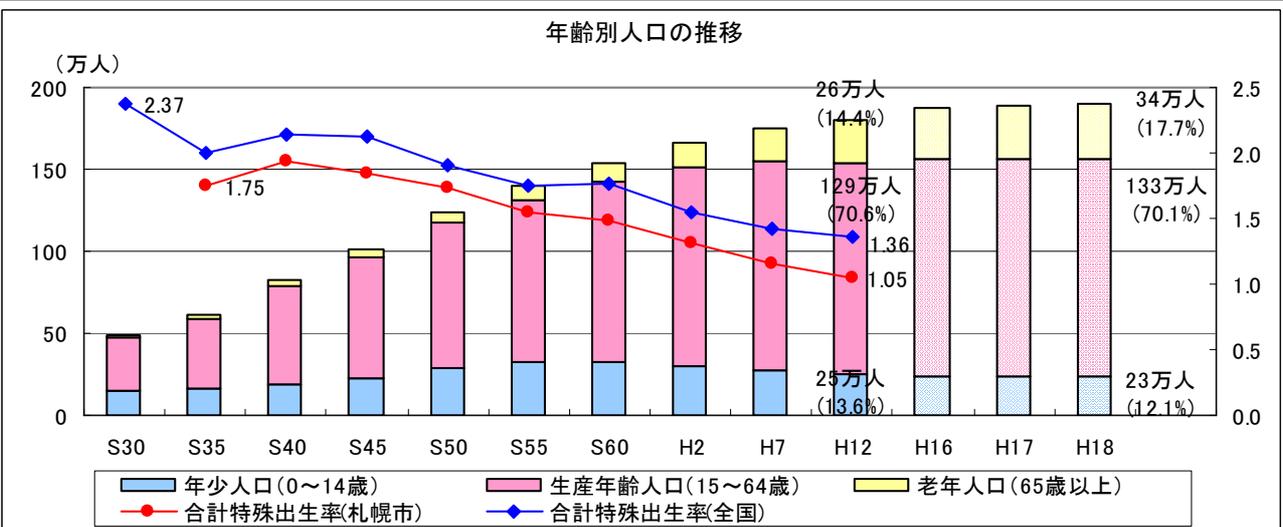
(1) 人口の増加率の推移

- 人口は、昭和45年に100万人を超えてからも増加を続け、平成12年には182万人となり、北海道の人口（568万人）の32.1%を占めるまでになった（平成15年の人口は186万人となっており、東京、横浜、大阪、名古屋に次ぐ全国5番目の規模）。
- 5年ごとの人口増加率は、昭和35～40年の33.4%をピークとして低下を続けている。
- 新まちづくり計画の最終年次にあたる平成18年の人口は、190万人と推計される（第4次長期総合計画では目標年次の平成32年の総人口を205～210万人と予測している）。



(2) 年齢別人口の状況

- 年々老年人口は増加、年少人口は減少しており、平成12年に割合が逆転した。人口総数に占める老年人口の割合は近年急激に上昇しており、高齢化が進行している。
- 合計特殊出生率は全国平均を常に下回り、近年大きく低下してきており、少子化の進行を促している。

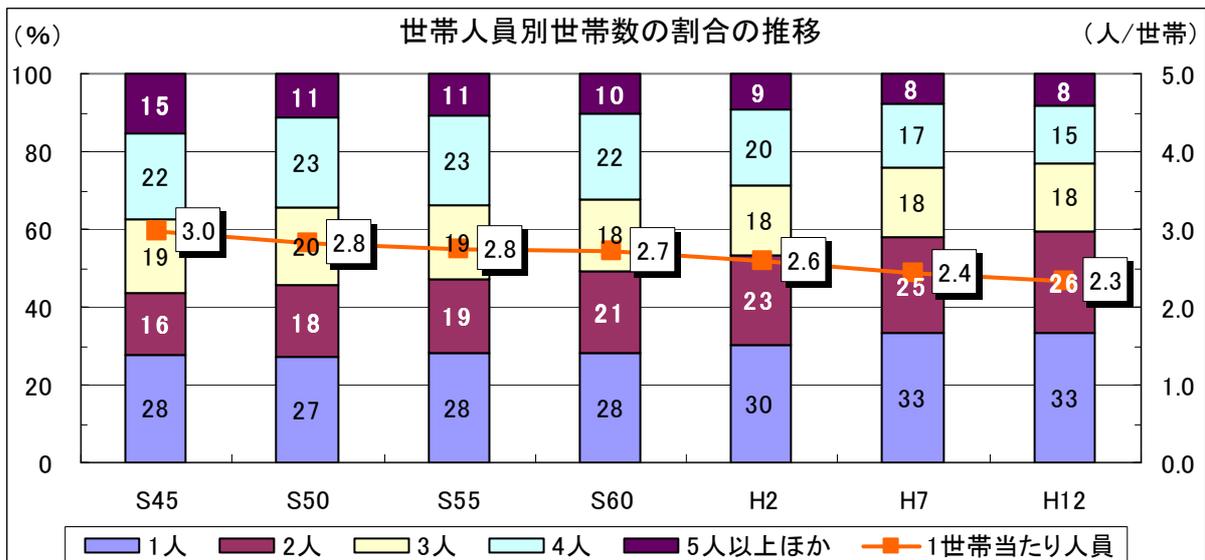


※年齢不詳を除いたため合計が総人口と一致しない

※合計特殊出生率 一人の女性が一生(15～49歳)の間に産む子どもの数

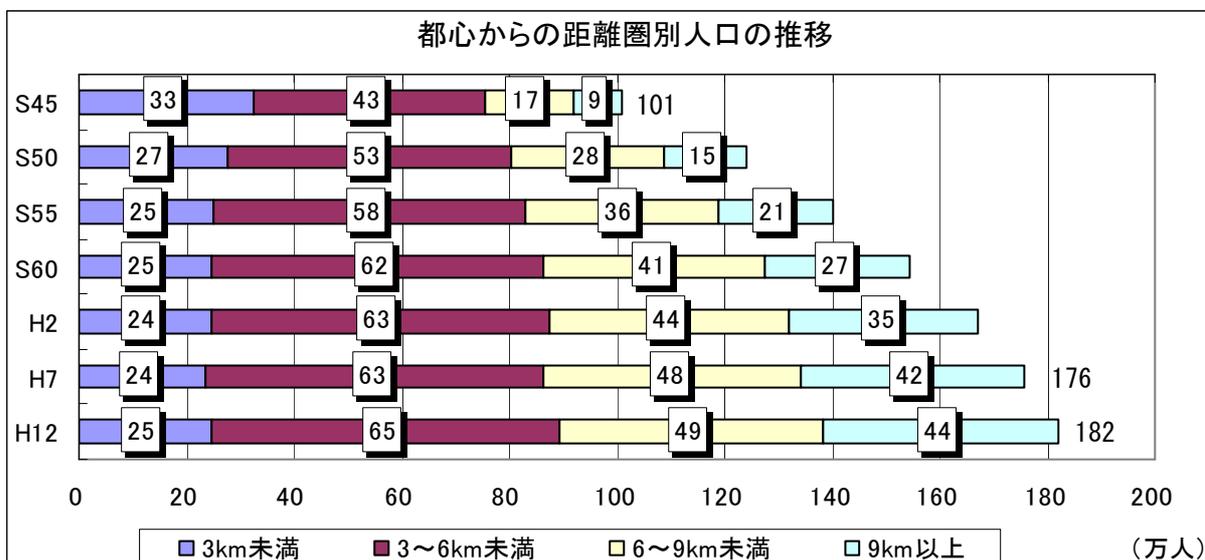
(3) 世帯構成の推移

○核家族化や少子高齢化が進み、札幌市の世帯構成は、2人以下の世帯の割合が増加し4人以上の世帯の割合が減少し続けている。
 ○1世帯当たりの平均人員は、昭和45年の3.0人から、平成12年には2.3人まで低下している。



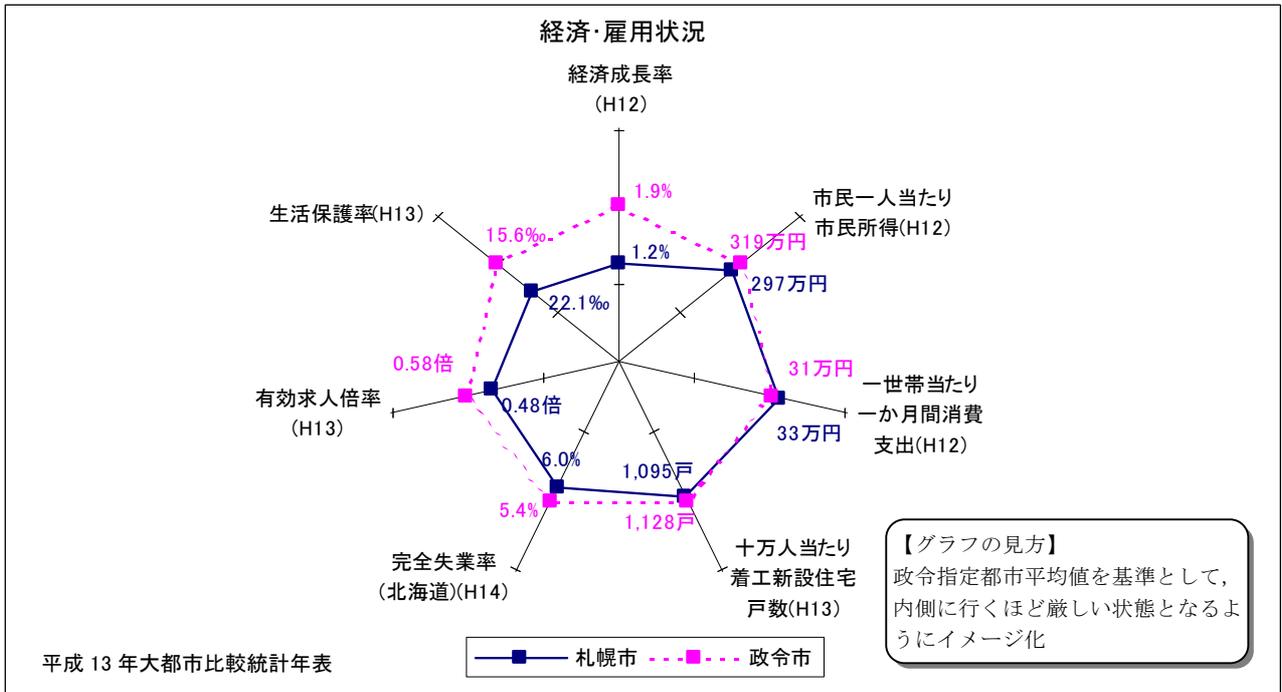
(4) 都心からの距離圏別人口の推移

○昭和45年以降は、都心から6km以上の距離圏の人口が大幅に増加し、平成7年には、6km圏内と6km圏外の人口がほぼ同じ割合に達している（市街地の拡大）。
 ○都心部（3km圏内）の人口は減少し続けてきたが、平成7年から12年にかけては1万人程度増加している（都心回帰）。

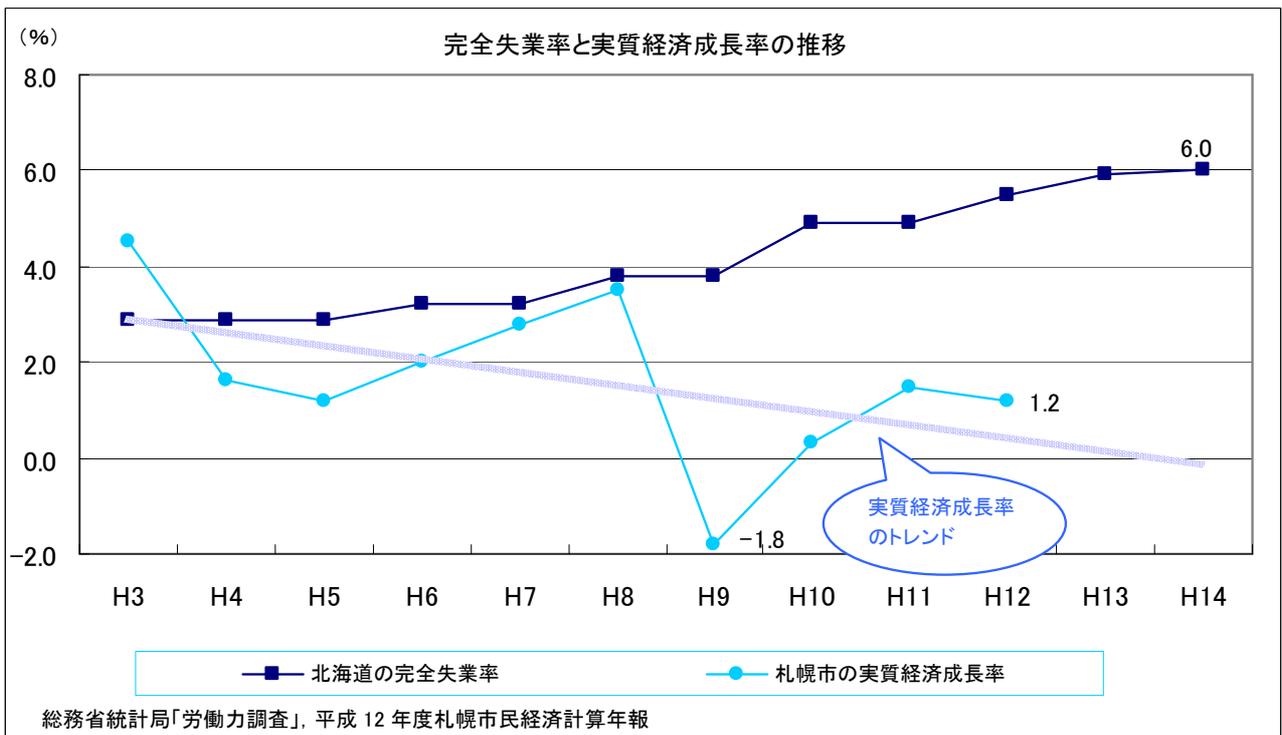


3 経済雇用状況

- 経済雇用状況は、ほとんどの指標で他都市よりも厳しい状況にある。
- 特に、北海道の完全失業率は、全国(平成14年度:5.4%)よりも高い水準で推移しており上昇し続けている。
- 札幌市の経済成長率は、平成10年度以降プラス成長に転じているものの、1%台の低い成長率となっている。

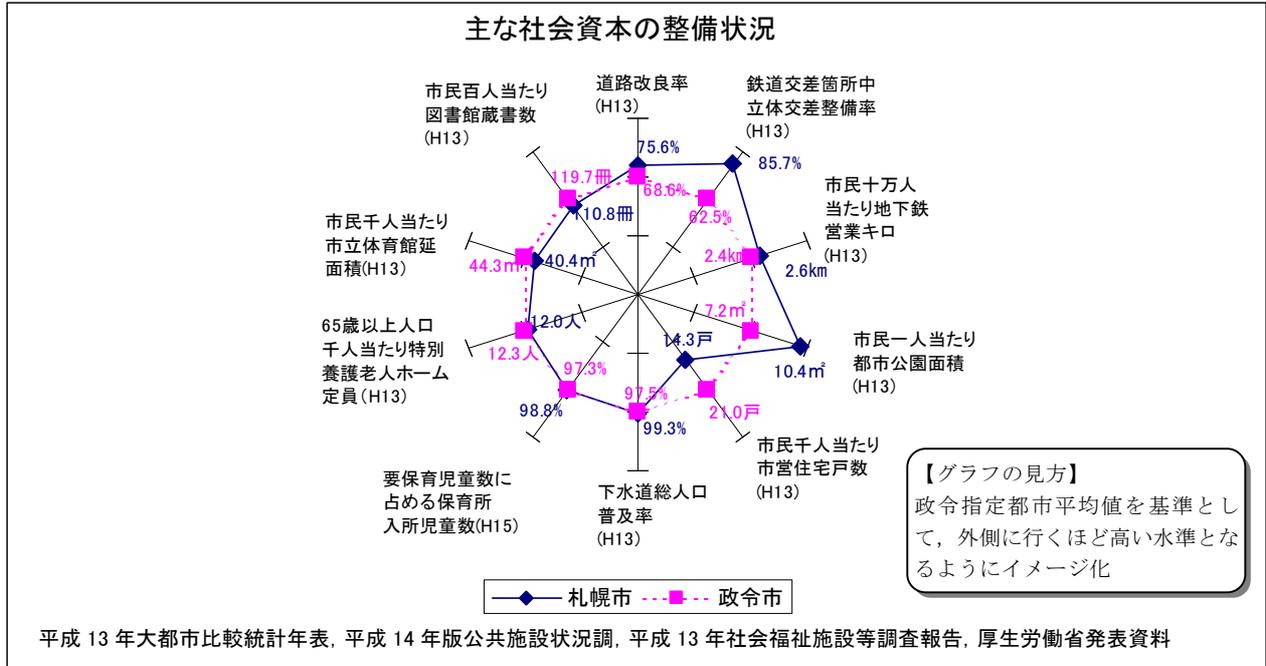


※完全失業率は、全国と北海道の比較

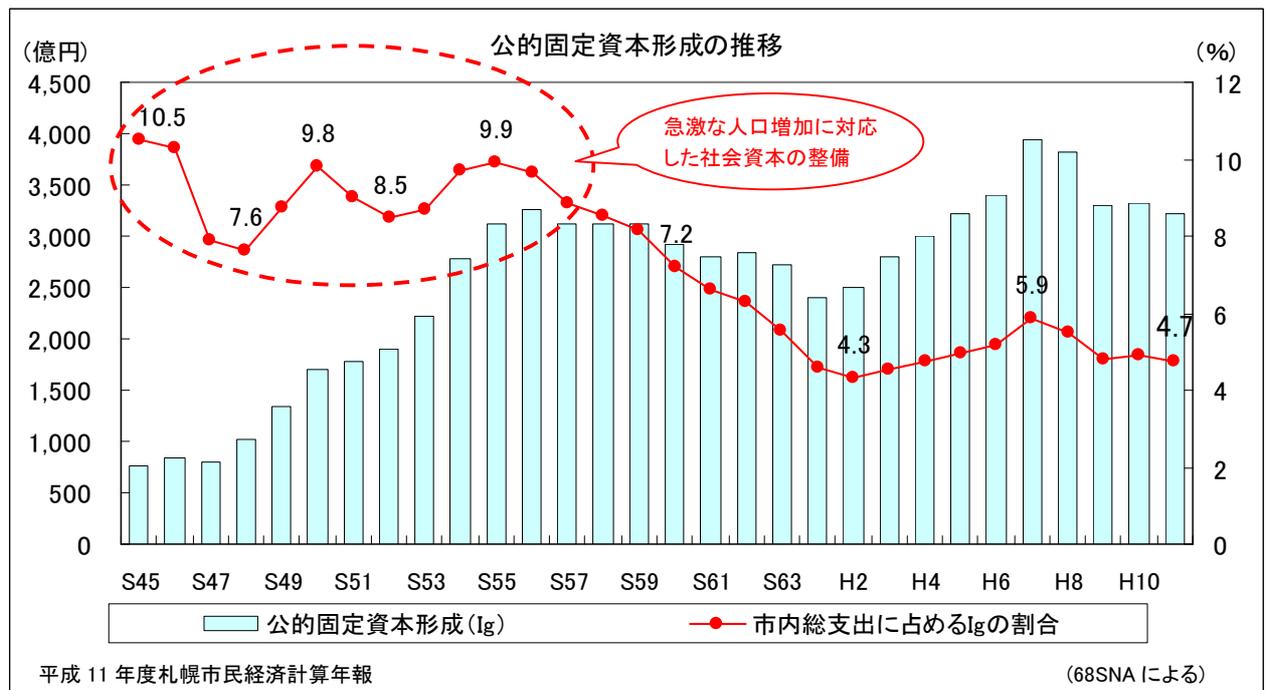


4 社会資本の整備状況

- 昭和 30～50 年代初頭にかけての急激な人口増加に対応して、社会資本の整備充実を図ってきており、主要な社会資本の整備状況は、他の政令指定都市と比較しても高い水準にある。
- 近年では、公的部門が行う社会資本に係る投資額を示す「公的固定資本形成」の市内総支出に占める割合は低い水準で推移している。



※「市民 10 万人当たり地下鉄営業キロ」の政令市平均は未整備市を除く。



※公的固定資本形成 国, 道, 札幌市の建設費や機械設備等の購入を計上したもの。

※市内総支出 家計や政府などが市内での消費や資本形成に支出する額